

新邸遺跡発掘調査報告書

1986

志木市遺跡調査会

はじめに

志木市遺跡調査会
会長 金子庄三

文化財は私達の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であり、先人の汗の結晶ともいえるこの業績を知ることは、新たな文化を創造してゆく責任をもつ私達にとって、大きな支えとなることでしょう。それ故に、この文化財を保護し、後世に伝えてゆくことは、私達の使命であると言っても過言ではありません。

志木市は武蔵野台地の東端に位置し、荒川・柳瀬川に面した台地縁辺部には埋蔵文化財の包蔵地が分布しています。

東京近郊に位置する当市は、都市化の現象が著しく、種々の開発が進むなかで、埋蔵文化財を保護・保存してゆくことは、重要な課題となっております。

ここに報告する『新邸遺跡』の発掘調査は、市道改良工事に伴う記録保存のため実施したもので、多くの成果を上げ報告書として刊行することができました。本書が埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに、郷土の歴史を研究するための資料として役立つことができれば幸いに思います。

最後になりますが、発掘調査から報告書刊行に至るまでには、埼玉県教育局文化財保護課、志木市文化財保護委員をはじめ多くの皆様のご指導とご協力を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市柏町5丁目に所在する新邸遺跡^{新邸跡}の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、市道第1063号線の改良工事に伴い、志木市教育委員会の斡旋により、志木市遺跡調査会が昭和60年10月21日から同年12月16日まで行った（60委保第5の1523号）。
3. 本書の作成・編集は、志木市遺跡調査会が行った。また、執筆者名は文末に記した。
4. 本書の挿図版の指示は、以下の通りである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。また、ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構の略記号は以下の通りの内容を示す。

J = 住居址、D = 土坑、W = 井戸址、M = 溝址

5. 発掘調査及び出土遺物の整理作業にあたっては、下記の諸機関・諸氏より御指導・御援助を賜わった。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局文化財保護課・志木市教育委員会・志木市史編さん室・志木市建設部建設課・志木市水道部・志木市立志木第三小学校・会田 明・浅野晴樹・荒井幹夫・飯田充晴・大野伊平次・小出輝雄・肥沼正和・笹森健一・斯波 治・高橋 敦・中島岐視生・並木 隆・松本富雄

6. 調査組織

役員 会長 金子庄三（志木市教育委員会教育長）

副会長 斎藤昭吉（志木市教育委員会教育次長）

理事 萩元家義（志木市文化財保護委員長）

神山健吉（志木市文化財保護委員）

根岸正文（ “ ” ）

宮野和明（ “ ” ）

井上国夫（ “ ” ）

理事兼事務局長 白砂正明（志木市教育委員会社会教育課長）

監事 田中義二（志木市教育委員会社会教育指導員）

服部一次（志木市立郷土資料館長）

事務局 清水孝平（社会教育課長補佐）

鈴木重光（社会教育係主査）

岩崎香代子（社会教育係）

調査員 佐々木保俊

尾形則敏

発掘調査及び整理作業協力員

笠原博子・木村恵美子・菊地美智子・佐藤小夜子・田中鎮庫・高田輝子・筒井砂知子・

深井恵子・村井京子・屋代時子・山科美智

目 次

はじめに	
例 言	
目 次	
図版目次	
挿図目次	
I. 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の立地と環境	2
3. 発掘調査の経過	2
II. 検出された遺構と遺物	4
1. 住居址	4
2. 土坑	5
3. 井戸址	10
4. 溝址	11
5. 段切状遺構	12
6. 包含層出土遺物	12
III. まとめ	15

図 版 目 次

図版 1	遺跡
図版 2	遺構
図版 3	1号住居址出土遺物
図版 4	土坑・井戸址・溝址・段切状遺構出土遺物
図版 5	包含層出土遺物

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布 (1/40000)	1	第7図	土坑・井戸址・溝址・段切状遺構	
第2図	発掘地点と周辺の地形 (1/5000)	2		出土遺物 (1/3)	7
第3図	遺構配置図 (1/500)	3	第8図	4号土坑出土遺物 (4/5)	8
第4図	1号住居址・2号土坑・		第9図	7号土坑 (1/60)	8
	2号溝址 (1/60)	4	第10図	1号井戸址 (1/60)	11
第5図	1号住居址出土遺物 (1/3)	5	第11図	包含層出土遺物 1 (1/3)	13
第6図	段切状遺構・土坑・溝址 (1/60)	6	第12図	包含層出土遺物 2 (1/3)	14

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

昭和60年9月2日、志木市建設部建設課（以下、建設課）より、志木市教育委員会（以下、教育委員会）に、志木市柏町5丁目2995-1他に所在する市道第1063号線の改良工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての照会があった。

該当地は、志木市No. 8遺跡内にあり、教育委員会では事前の記録保存のための発掘調査が必要である旨を伝え、建設課との協議を行った。

10月12日、教育委員会に志木市長細田喜八郎氏から埋蔵文化財発掘届が提出されたため、教育委員会では調査主体として志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。

遺跡調査会では、この調査を受託することを決定し、志木市長細田喜八郎氏と委託契約を締結、10月14日には文化庁長官宛、埋蔵文化財発掘調査届を提出し、同月21日から発掘調査を開始した。



第1図 周辺の遺跡 (1/40000)

2. 遺跡の立地と環境

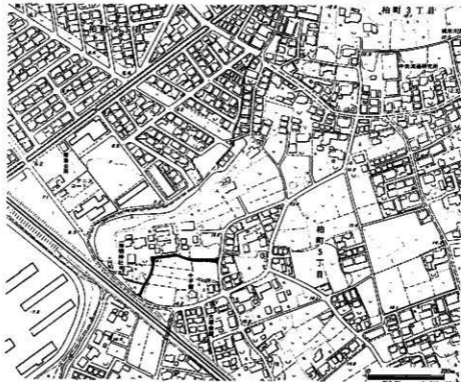
志木市は埼玉県南東部に位置し、その主な地理的景観は、荒川（旧入間川水系）の形成した沖積地と洪積台地とからなる。この台地部分は、武蔵野台地のうちの野火止台の先端部にあたり、台地の北西には狭山丘陵に源をもつ柳瀬川が北東流する。新邸遺跡は、この柳瀬川の開折した低地を見おろす台地縁辺部に位置し、標高約13.5m、低地との比高差7m前後を測る。

学史的にみた新邸遺跡は、酒詰仲男氏による「志木町大字大塚・黒浜期貝塚」に相当するものと思われる。また、市史編さん室で行った表面採集によると、自然遺物としてオオタニシ・カワニナ・ヤマトシジミ・マガキ・ハマグリ・アサリ・サルボウ・オオノガイ・イシガイ・カガミガイが検出されている。

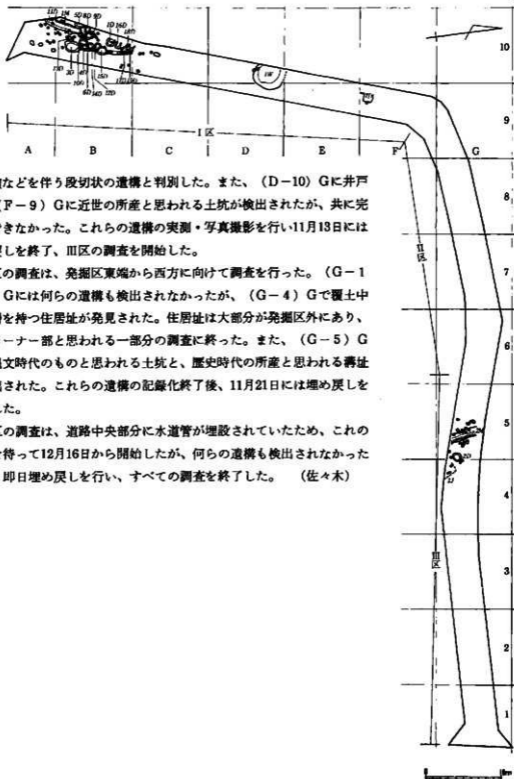
3. 発掘調査の経過

今回の発掘調査は、道路改良工事に伴うものであった。当該道路を使用しない限り、出入りのできない家もあったため、調査は出入口を確保しつつ3区に分けて実施した。いずれの区も道路部分は厚く砂利が敷き詰められており、表土剥ぎはバックホーを使用した。

I区の調査は、発掘区南端から北方に向けて順次調査を行う形で10月21日から開始した。（B-10）Gを中心に黒褐色土の落ち込みが検出され、当初住居址と想定して調査を行ったが、土坑・地



第2図 発掘地点と周辺の地形 (1/5000)



下式墳などを伴う段切状の遺構と判別した。また、(D-10) Gに井戸址、(F-9) Gに近世の所産と思われる土坑が検出されたが、共に完掘はできなかった。これらの遺構の実測・写真撮影を行い11月13日には埋め戻しを終了、III区の調査を開始した。

III区の調査は、発掘区東端から西方に向けて調査を行った。(G-1~3) Gには何らの遺構も検出されなかったが、(G-4) Gで覆土中に貝層を持つ住居址が発見された。住居址は大部分が発掘区外にあり、住居コーナー部と思われる一部分の調査に終わった。また、(G-5) Gには縄文時代のもと思われる土坑と、歴史時代の所産と思われる溝址が検出された。これらの遺構の記録化終了後、11月21日には埋め戻しを完了した。

II区の調査は、道路中央部分に水道管が埋設されていたため、これの移設を待つて12月16日から開始したが、何らの遺構も検出されなかったため、即日埋め戻しを行い、すべての調査を終了した。(佐々木)

第3図 遺構配置図(1/500)

II 検出された遺構と遺物

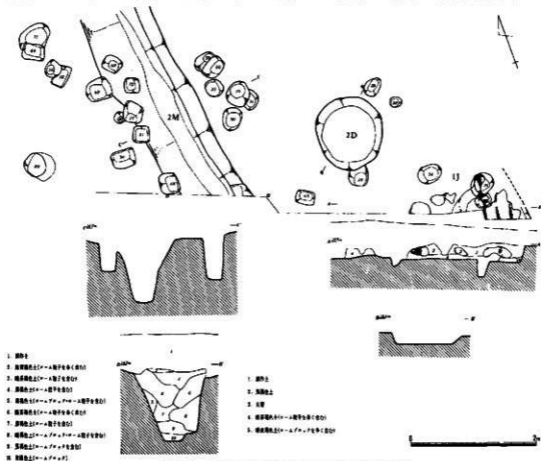
1. 住居址

1号住居址(第4図)

大部分が発掘区外にあり、僅かな部分の調査に終った。また、耕作などによる攪乱が著しく壁の検出もほとんどできなかった。壁高は判明した部分で27cm前後を測り、急斜に立ち上がる。床面は貝層下がよく硬化していた。ピットは3本確認された。覆土は黒褐色土を基調とし、下層はロームブロックを多く含む暗黄褐色土となる。床面から若干浮いた状態で貝層ブロックが検出された。貝層はヤマトシジミを主体とし、貝層上部にはマガキが堆積する。人工遺物は土器片のみで貝層上からの出土が大部分で、黒浜式土器の出土量が多い。

1号住居址出土遺物(第5図)

1~3は有文土器。1は連続爪形文が口縁と平行に施される。2は平行沈線が施された土器で、指頭によると思われる押捺が加えられる。3は単節R Lの斜縄文を地文とし、櫛状施文具による押



第4図 1号住居址・2号土坑・2号溝址(1/60)

し引き文がみられる。

4～6は単節の斜縄文が施された土器。4は口縁部が大きく外反する。6は結節のある斜縄文。以上の土器は胎上に繊維を含まず、諸磯a式土器と考えられる。

7～14は無節の斜縄文が施された土器。9・11は下半が無文となる。10は反摺りの縄かもしれない。15～19は単節の縄文が施された土器。20・21は附加条の縄文であろうか。

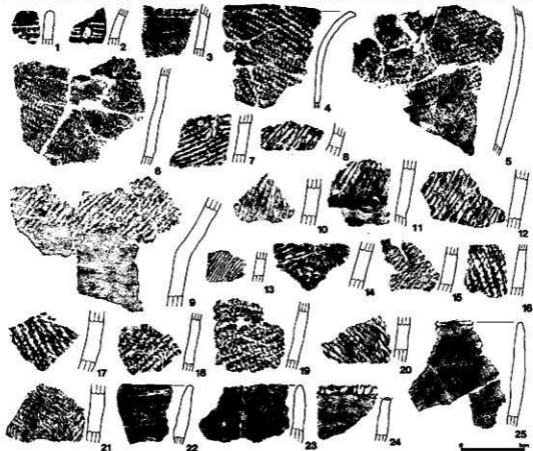
22～25は無文の上器。23・25は同一個体の土器と思われ、内外面ともよく磨かれている。24は口唇上に刻みが加えられる。

7～25の土器は胎上に繊維を多く含み、黒浜式土器と考えられる。 (佐々木)

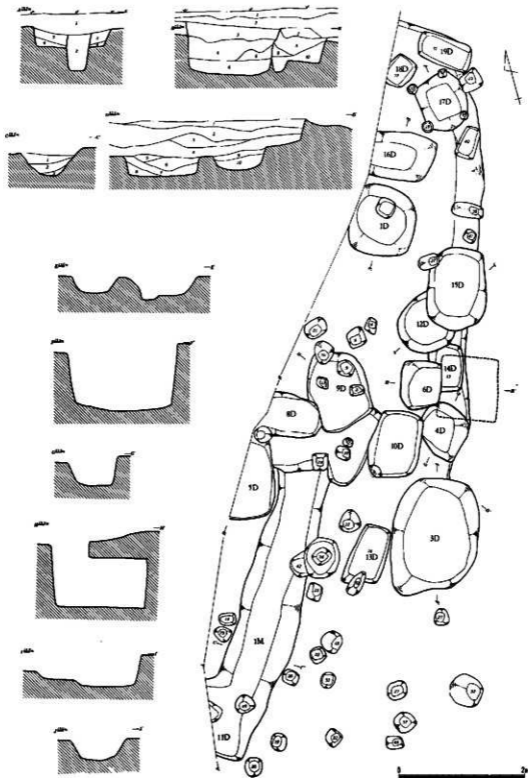
2. 土 坑

1号土坑 (第6図)

113×100cmの隅丸方形を呈する。坑底はほぼ平坦で深さ30cm前後を測る。北壁下ほぼ中央にはピットが1本検出された。覆上はローム粒子を多く含んだ茶褐色土を基調とする。遺物は縄文時代



第5図 1号住居址出土遺物 (1/3)



第6図 段切状遺構・土坑・溝址 (1/60)

の土器片が僅かに出土した。

1号土坑出土遺物（第7図1～3）

1は半截竹管による平行沈線が施された土器。胎土には繊維を多量に含む。黒浜式土器であろう。
2・3は胎土に繊維を含まない土器。共に半截竹管により、2は幅広の連続爪形文、3は平行沈線が施される。踏碓b式土器であろうか。

2号土坑（第4図）

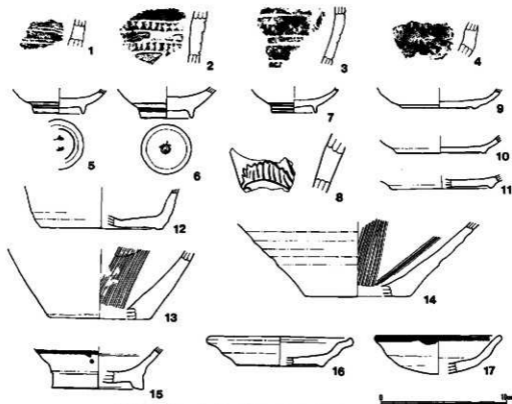
120×105cmの大略楕円形を呈する。坑底は平坦で深さ20cm前後を測る。覆土は2層に分けられ、上層は暗褐色土、下層はローム粒子を多く含む暗褐色土で、自然堆積状態を呈する。遺物は図示した土器片の他には、小破片が僅かにあるのみである。

2号土坑出土遺物（第7図4）

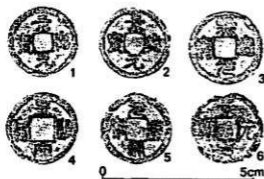
無文の土器で、胎土には繊維を含む。黒浜式土器であろうか。

3号土坑（第6図）

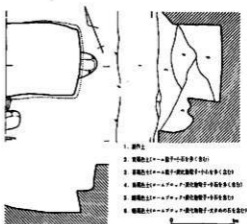
184×138cmの楕円形を呈する。坑底はほぼ平坦で深さ100cmを測る。覆土は2層に分けられ、上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層は多量のローム粒子、ロームブロックを含む黄褐色土である。遺物は板碑の破片と思われる緑泥片岩の他、鉄製品が1点出土している。その他、縄文時代の



第7図 土坑・井戸址・溝址・段切状遺構出土遺物 (1/3)



第8図 4号土坑出土遺物(4/5)



第9図 7号土坑(1/60)

土器片が僅かに出土しているが、混入したものであろう。

4号土坑(第6図)

80×78cmの隅丸方形を呈する。坑底は平坦で深さ40cm前後を測る。遺物は宋銭が6枚出土した。墓坑と考えられる。

4号土坑出土遺物(第7図)

1・2は景德元宝(北宋、1004年)、3は熙寧元宝(北宋、1068年)、4は皇宋通宝(北宋 1039年)、5は元祐通宝(北宋、1086年)と考えられる。6は景定元宝(南宋、1260年)であろうか。

5号土坑(第6図)

1号溝址の北西に隣接し、北側半分が未調査区に入る。又、8号上坑を切って構築している。推定規模は130×80cmで隅丸長方形を呈すると思われる。坑底はほぼ平坦で深さ80cm前後を測る。覆土は4層に分けられ、3層はローム粒子、炭化物粒子を含む暗茶褐色土、4層はやや大きめのローム粒子を多量に含む暗茶褐色土、5層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土、6層はロームブロックを多量に含む暗褐色土である。遺物は鉄製品が3点、砥石が1点出土している。その他、縄文時代の土器片が、出土するが、覆土から観察して当該期の所産とは思えない。混入したものであろう。

6号土坑(第6図)

地下式竈の形態をもつ。入口堅坑部の上端は80×64cmで長方形を呈し、下端はそのまま垂下して主体部底面につながっている。確認面からの深さは104cmである。主体部の平面形態は100×90cmで長方形を呈し、坑底面は平坦である。坑底からの立ち上がりは垂直で、そこから上方80cmに至り天井部に到達する。内部構造においては付属施設もなく、単純な箱形を呈する。遺物は鉄製品が1点出土した。

7号土坑（第9図）

北西端が未調査区に入り、平面形態は窺い知れないが、おそらく長方形を呈するであろう。確認できる短軸1辺は110cm前後を測る。坑底は短軸方向で平坦であるが、長軸方向では南東～北西にかけて緩やかに上がっている。坑下端は上端より若干、奥に広がる構造である。又、3本のビットが付設するように検出されているが、そのうち北西側の2本については土層堆積状態より、同時埋没を示し、時間差があまり考えられない。東側のビットについてもその可能性が考えられよう。

7号土坑出土遺物（第7図5～7）

いずれも染付碗の底部破片である。釉はいずれも淡青色を呈する。5・6には裏銘がある。時期は18世紀後半であろうか。

8号土坑（第6図）

北西端が未調査区に入る。平面形態は長方形を呈し、おそらく100×70cmの大きさをもつであろう。深さ50cmを測る。南壁下においてビットが1本検出された。覆土は4層に分けられ、7層はローム粒子を含む暗褐色土、8層はローム粒子を多量に含む暗黄褐色土、9層はロームブロックを含む暗褐色土、10層はローム粒子を多量にロームブロックを少量含む暗茶褐色土である。遺物の出土はなかった。

9号土坑（第6図）

120×96cmの大略隅丸長方形を呈する。北壁下及び坑底において計4本のビットが検出された。坑底は平坦で深さ50cm前後を測る。覆土は4層に分けられ、ローム粒子を多量に含む暗黄褐色土及び暗褐色土を基調とする。遺物は出土しなかった。

10号土坑（第6図）

110×78cmの隅丸長方形を呈する。坑底はやや丸底ぎみに窪んで最深30cmを測る。覆土は2層に分けられ、上層はローム粒子を含む暗褐色土、下層はローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土である。南西隅においてビットが1本検出された。遺物は出土しなかった。

11号土坑（第6図）

1号溝址の南端に位置し、西側半分が未調査区に入る。そのため形態、規模等については不明である。深さ30cm前後を測る。坑底はほぼ中央と思われる所にビットが1本検出された。覆土は2層に分けられ、上層は暗黄褐色土、下層はローム粒子を多量に含む黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

12号土坑（第6図）

100×90cmの人略楕円形を呈する。坑底は平坦で深さ10cm前後を測る。遺物の出土はなかった。

13号土坑（第6図）

92×54cmの長方形を呈する。坑底はほぼ平坦で深さ15cm前後を測る。南壁下にはビットが1本検出された。

14号土坑（第6図）

6・12号土坑に隣接する。平面形態は78×56cmの略丸長方形を呈する。坑底はほぼ平坦で深さ30cm前後を測る。

15号土坑（第6図）

132×92cmの大略丸長方形を呈する。坑底は平坦で深さ30cm前後を測る。12号土坑に隣接し、北西隅付近ではビットが1本検出された。

16号土坑（第6図）

北西端が未調査区に入る。平面形態はおそらく長方形を呈するであろう。確認できる短軸一辺は74cmを測る。坑底はほぼ平坦で深さ30cm前後を測る。覆土は2層に分けられ、上層はローム粒子を含む暗褐色土、下層はローム粒子を多量に含む暗黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

17号土坑（第6図）

88×74cmの略丸長方形を呈する。坑底はやや丸底ぎみで最深で30cmを測る。四隅には規則的にビットが4本配されて検出された。ビットは径18cm前後の円形を呈し、掘り込みは上端より35～45cmを測る。本遺構に付属するものと考えられる。

18号土坑（第6図）

52×44cmの長方形を呈する。坑底はほぼ平坦で深さ25cm前後を測る。覆土はローム粒子を多量に含む暗黄褐色土を基調とする。

19号土坑（第6図）

88×45cmの長方形を呈する。坑底はほぼ平坦で深さ55cm前後を測る。

3. 井戸址

1号井戸址（第10図）

遺構の西側3分の1が未調査区に入る。平面形態はほぼ円形を呈するものと思われ、確認最大径は400cmを測る。断面形はN-S軸方向で見た場合、南壁が約60度の傾斜、北壁が約70度の傾斜をもち、やや変形したロート状を呈する。おそらく、以下は若干、つばまりながら、直径180cm前後の円形プランをもって垂下するものと思われる。なお、深さについては、規模及び安全性の確保のため

めに全掘を避け、確認面より180cmの所で中断した。又、南側にビットが2本検出されたが、本遺構に伴うものであるかは不明である。遺物は、陶器片・板碑片・馬の歯等があった。

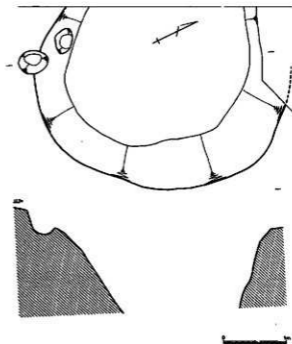
1号井戸址出土遺物（第7図8～14）

8は瀬戸系の花瓶と思われる破片である。濃茶褐色の鉄釉がかけられる。時期は15世紀後半と思われる。

9～11は志野釉がかけられた皿の破片。釉は内外面にかけられ、底面の一部にまで及ぶ。時期は16世紀後半ないし17世紀前半と考えられる。

12は徳利と思われる底部破片。淡緑色の釉がかけられる。18世紀後半か。

13・14は播鉢の底部破片。



第10図 1号井戸址（1/60）

4. 溝 址

1号溝址（第6図）

（B-10）Gの土坑集中域に位置する。N-30°-Eの走行角度をもち、南北端で土坑と重複し、特に南端において11号土坑との重複後、さらに未調査区に延長する可能性がある。溝幅は上幅が90cm前後、下幅40cm前後で長さ約400cm、深さ約40cmを測る。断面形は東壁が約45度、西壁が約50度の傾斜角度をもつ逆台形を呈する。覆土は3層に分けられ、1層はローム粒子を含む黒褐色土、2層はローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土、3層はローム粒子を多量に含む暗黄褐色土である。

1号溝址出土遺物（第7図15）

徳利の底部破片であろうか。茶色の釉がかけられる。

2号溝址（第4図）

（G-5）Gに位置する。N-8°-Wの走行角度をもち、南北両端とも未調査区に入る。溝幅は上幅110cm前後、下幅10～30cmで長さ360cm、深さ120cmを測る。断面形は「片栗研」の形態を呈する。溝底は平坦であるが、幅は北側が狭くなる。又、本遺構をはさんで左右にビット群が検出されたが、比較的配置よく並んでいるため、付属施設の可能性が想定できよう。遺物は縄文時代・古墳時代の土器片が僅かに出土している。

5. 段切状遺構

段切状遺構（第6図）

（B-10）Gを中心に確認された土坑群・ピット群・溝址は基本的には本遺構内に構築されたものであろう。調査区内で確認できる範囲は北側19号土坑付近より南側3号土坑にかけてであり、全体的な規模については、おそらく地形的に谷側にあたる北西末調査区に広く延びているものと想定できる。傾斜角度約75度をもち、整地面は東～西にかけて緩やかに下がるものの奥に行くにつれて平坦になっている。深さは50cm前後を測る。覆土はローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

段切状遺構出土遺物（第7図16・17）

16は灰軸小皿。体部内面上部に稜をもち、口唇部は屈曲して直立する。内外面は淡黄緑色を呈する。

17は瀬戸系の灰軸小皿。軸は口縁部内外面にかけられるが、焼成温度が高すぎたためか、黒色を呈する。（尾形）

6. 包含層出土遺物

包含層及び耕作土・表土中出土の遺物を図示した（第11・12図）。

第11図1～52は縄文時代の土器である。量的には前期後半、諸磯式土器の出土が多い。

1・2は早期前半、熱糸文系の土器。共に単節RLの斜縄文が施される。1は口唇部が僅かに外反する。夏島式土器と思われる。

3～5は早期中葉、沈線文系土器。3は横位、斜位、4・5は横位の沈線が先端丸棒状の施文具により施される。田戸下層式土器に比定されよう。

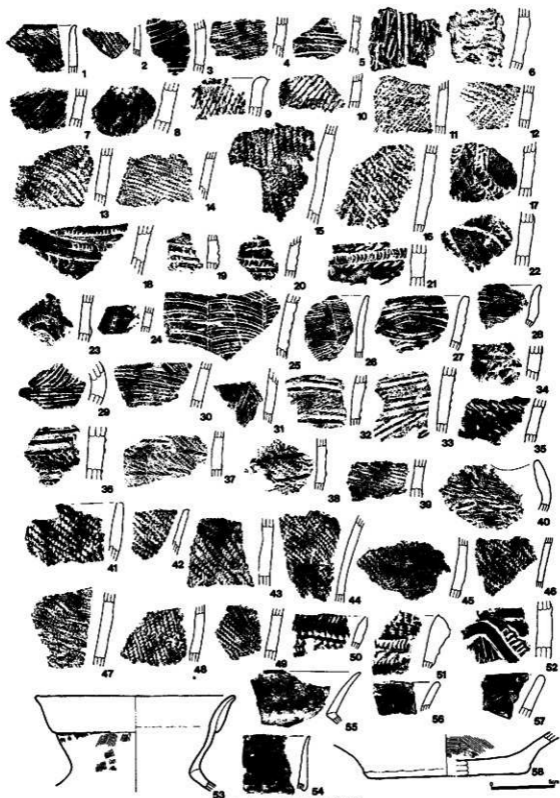
6～8は早期後半、条痕文系土器。6は内外面とも条痕文が施される。

9～16は前期前半、羽状縄文系の土器。すべて胎土中に繊維を含む。9は口唇部が僅かに肥厚する。無節Lの斜縄文が施されるが、縄文は口唇部まで及ぶ。10・11は無節Lの斜縄文が施される。12は単節の縄文が羽状に施される。13～16は単節RLの縄文が施される。これらの土器は概ね黒浜式土器に比定されようが、9は花積下層式土器の可能性もある。

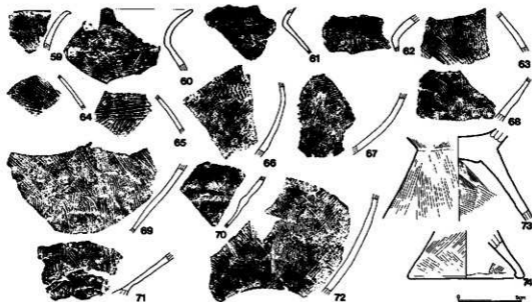
17～48は前期後半、竹管文系の土器である。

17～23は連続爪形文が施された土器。17・22・23は渦状に施されるようである。21は棒状施文具による刻みが増えられる。諸磯b式土器と考えられる。

24～31は沈線文が施された土器。24～26は半截竹管による平行沈線で肋骨文が描かれた土器である。24は縦位の区画に連続爪形文が用いられる。27は凸レンズ状の文様が施される。28は口縁部が僅かに外反する土器で、半截竹管による条線状の平行沈線が施される。29・30は横位・斜位に平行沈線が施された土器。29はキャリバー形の器形になろうか。31は弧状に平行沈線が施される。肋骨文が施される土器は諸磯a式土器に、他は大部分諸磯b式土器に比定されよう。



第11图 包含層出土遺物 (1/3)



第12図 包含層出土遺物2 (1/3)

32～39は浮線文が施された土器。いずれも縄文を地文とし、32～37は浮線上にヘラ状施文具による刻みを加えられる。諸磯b式土器であろう。

40はキャリバー形を呈すると思われる波状口縁の土器で、集合した平行沈線を地文とし、短い浮線文が付けられる。浮線は半截竹管でなぞられ、浮線には刻みを加えられる。諸磯c式土器であろう。

41～49は縄文が施された土器。いずれも単節R Lの斜縄文が施される。諸磯a・b式土器に相当しよう。

50は中期初頭の土器。口唇部が両面から削がれたように尖る。口縁部には刻みを加えられ、連続した三角形の刺突文が多段に施される。五領ガ台式土器と思われる。

51・52は中期中葉の土器。51は口唇部が肥厚し、刺突文が施され、連続爪形文が2段巡らされる。52は沈線による区画文・充填文がみられる。勝坂式土器である。(佐々木)

53～74は古墳時代前期、五領式土器である。

53～58は壺形土器。53は口縁部がやや外反する複合口縁をもち、頸部は急角度に屈曲する。色調は内外面とも暗赤褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒・小石を含む。口縁部外面はヨコナデの後にみがき調整が施され光沢をおびる。頸部は刷毛目調整の後にみがき調整が加えられ、刷毛目痕を若干消している。内面は横方向のていねいなみがき調整が施され光沢をおびる。54は複合口縁の土器で橙色を呈する。内外面ともに刷毛目調整の後にみがき調整が施されている。55は内外面ともにみがき調整が施され黒色の光沢をおびる。56は外面が右傾する刷毛目調整の後にヨコナデ、内面はヨコナデが施される。色調は赤褐色を呈する。複合口縁の土器であろうか。57はやや厚めの土器で、外面は刷毛目調整の後にみがき調整、内面はヨコナデが施され、その後若干みがき調整が加えられる。58は底部破片。外面はみがき調整が施され黒色に光沢をおびる。内面は刷毛目調整され、底部

付近はヘラナデが施される。

59～74は台付甕形土器と思われる。

59～62は口頸部の破片。59は口縁部が外湾する土器で、内外面とも刷毛目調整されるが、外面は軽クヨコナデが加えられる。60・61は頸部が急角度で屈曲して外反する。共に外面は刷毛目調整が施されるが、口縁部はヨコナデが加えられ刷毛目痕を消している。内面は60が口縁部刷毛目調整、以下ヘラナデされる。61はヨコナデされる。62は59と同 一 個体になろうか。

63～65は胴部上半の破片。刷毛目調整はやや乱雑に施される。63は内面も刷毛目調整される。64・65はナデ調整であろう。

66～72は胴部下半の破片。刷毛目調整は乱雑に施される。71・72は脚台部との接合部。

73・74は脚台部。73は「ハ」字状に外反し、内外面は刷毛目調整される。74は脚端部が内側に折り返される。内外面とも刷毛目調整されているが、みがきにより部分的に消されている。(尾形)

III ま と め

今回の発掘調査は、僅か4m幅のトレンチ状の発掘であったため、検出された遺構の大半は部分的な調査に終った。しかし、木遺跡の発掘調査は初めてのことであり、これにより遺跡の性格の一端を知ることができた。

1号住居址は縄文時代前期のもので、覆上中にはヤマトンジミを主体とする貝層が堆積していた。土器の出土量が少ないため疑問も残るが、一応黒浜式期の所産として揃えておきたい。荒川右岸の該期の貝塚としては、谷奥部に位置していて、その立地条件が注目される。

土坑の多くは段切状遺構に構築されていたが、地下式壙や宋銭が埋納された墓坑の存在から時期的には中世のものと考えられるようである。なお、段切状遺構から出上した瀬戸系の灰釉小皿が15世紀後半の年代が与えられるようである。ところで、この道筋は鎌倉街道の伝承地でもあり、また、調査地点の近くにある『千手館(千手堂)』は鎌倉時代末期ないし室町時代中期にかけての創建といわれている。中世の遺構についてはこれらと何らかの関係があるのかもしれない。(佐々木)

〔参考文献〕

酒誌 仲男 1959『日本貝塚地名表』

志木市教育委員会 1985『志木市の社寺』志木市の文化財 第10集

志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』

図

版



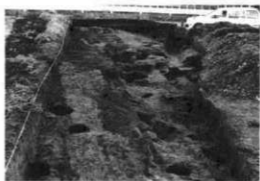
遺跡近景



発掘風景



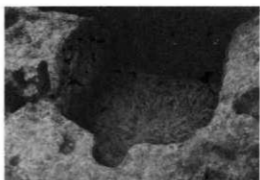
1号住居址



段切状遺構



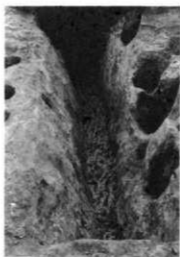
3号土坑



7号土坑

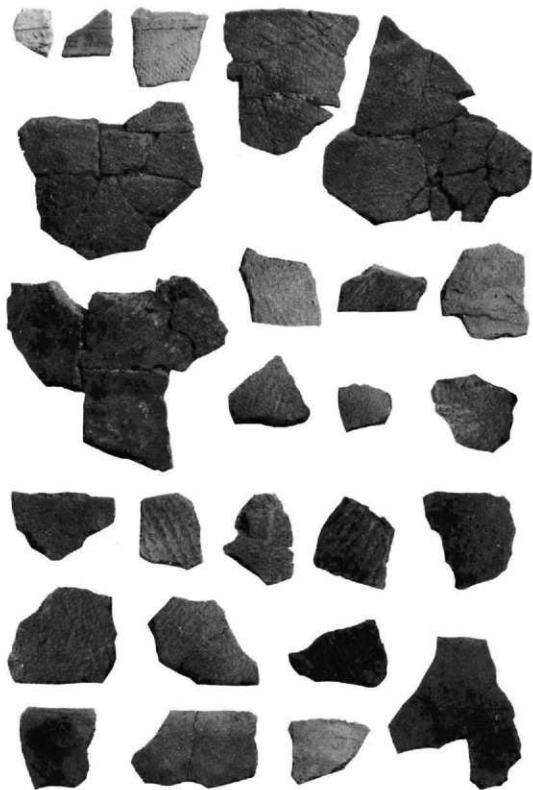


1号井戸址

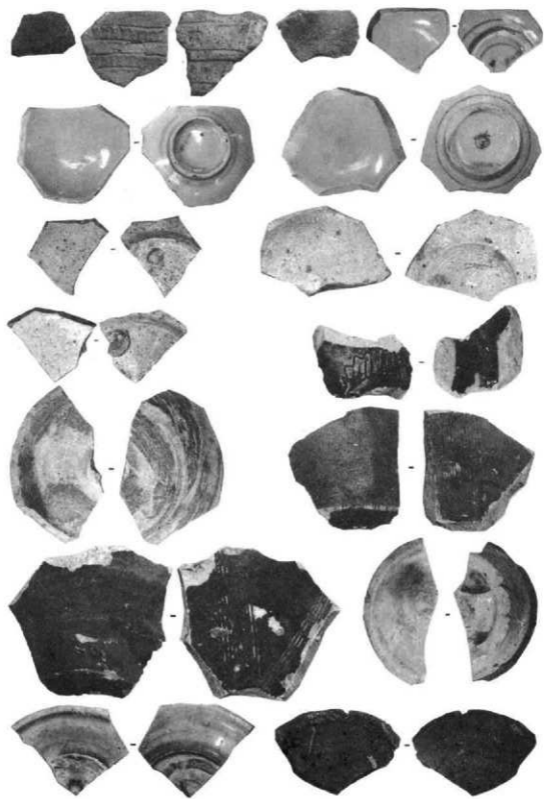


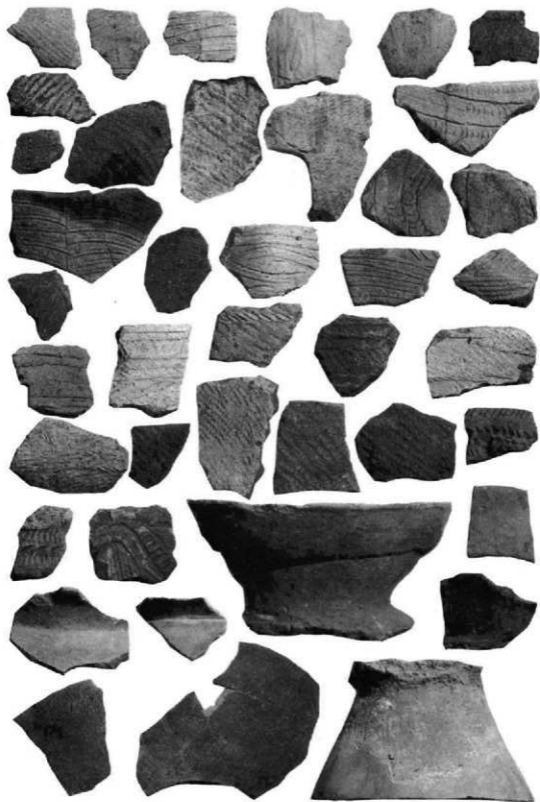
2号溝址

图版三
一号住居址出土遗物



图版四 土坑·井戸址·溝址·段切状遺構出土遺物





志木市遺跡調査会調査報告第2集

新邸遺跡発掘調査報告書

発行 志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 昭和61年3月31日

印刷 松村印刷株式会社